

# 法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227

ブログ <https://hokke-commons.jp> / メールアドレス [hokkecommons@gmail.com](mailto:hokkecommons@gmail.com)

## 巻頭言

## 私の夢見る法華コモンズ仏教学林

法華コモンズ仏教学林 事務局 林 明彦

私は一般人なのですが、前身の本化ネットワーク研究会の時代から、自身が興味を持った講座に参加しておりました。多少、IT 方面の知識があることから縁あって法華コモンズ仏教学林事務局で映像記録・動画配信・ブログ運営などでお手伝いさせていただくことになりました。コモンズ講座にご参加の方、先生方にご不便をおかけしていることもございますので、この場でお詫びを申し上げます。

さてこの度、巻頭言をという重責を任されまして、特別学究的な内容を掘り下げたりしている訳でもなく、僧籍があり信徒の方と接するようなこともない立場で何を書けばよいかわりに迷っておりましたが、またとない機会でもありますので日頃より個人的に考えている事柄について皆様に提起したいと思えます。

それは「信仰と学問は究極的に両立し得るのか」ということです。究極的には「自身が属する宗派の教学が学問的に否定された場合、その宗派をやめて、正しいとされた宗派に鞍替えできるであろうか」ということです。私自身のように特定の宗派を背負うような立場ではない人間にとっては宗旨替えをすることは比較的容易かもしれない（それでも心の葛藤は大きいですが）、一宗の重責を担う立場や檀徒を抱えている代々続いている住職の立場の方が、学問的に他宗の言い分の方が正しいと自身の中で結論付けた場合、どうされるのだろうか。例えば私の従兄弟は天台宗の住職ですが、檀徒の方に「今日から宗派を変更します、本尊も変わりますが、私に付いて来られる方はいない、そうでない方は去っていただいて結構です」とは決して言えないであろうし、本能的にそのような「自身の信仰が揺らぐような領域から忌避」しているだろうと思えます（こんな話を従兄弟にしたことはございません）。

このような問題を避ける一つの手段として、「それぞれの宗教・宗派は、それぞれに正しい」という、八百万の神々をお互いに認め合う考えもある訳ですが、こと日蓮聖人の宗教は正邪・勝劣を明確にされようとする傾向が強く、その後継者同士がまたそれぞれに互いの違いを論争し合い、現在の多数の宗派宗門に分化している訳です。もちろん他の宗教でも同じことは起こっているのですが、特に日蓮系教団では特に激しいのが実態かと思われれます。少しでも異なる見解を持つと「宗規違反」として処分し、聞き入れなければ追放のようなことを行う場合があることを実体験で見聞します。

このような難しい日蓮聖人の思想を、宗派を超えて学ぶ場を提唱し現実のものとされた西山茂理事長、および趣旨に賛同され運営を担っておられる布施義高学林長、教学委員の諸先生方の情熱と努力はいかほど大変なものであろうかとスタッフの端くれとして感嘆しております。

しかしその一方、以前の本化ネットワーク研究会時代のような「日蓮門下の社会的活動に関する講義が比較的少ない」面もあります。日蓮聖人は、社会への直接的な言及、提言、門下への指南をなされました。社会活動的な講義は連続講義には向かない側面もありますが、一日集中講座や法華仏教講座のような毎回異なる講師による講座などで積極的に開催して行ければと考える次第です。

法華コモンズ仏教学林が、学問的論争の場を提供しつつ、宗派論争を乗り越え、「社会を変革し得る、日蓮聖人の仏教のコア（核）となる日」を夢見ながら、これからもスタッフとして一翼を担わせていただければと考える今日この頃です。



# 「歴史から考える日本仏教⑫」 中世社会と社寺の諸相

講師 菊地 大樹 先生



菊地大樹先生の連続講座「歴史から考える日本仏教⑫」が、令和七年度前期全四回のオンライン連続講義として〈中世社会と社寺の諸相〉をテーマに企画された。各回午後六時三〇分～丸々二時間、第一回～第三回はオンライン、第四回は新宿・常圓寺様祖師堂地階ホールを会場として対面&オンライン実況の形式で開催した。毎回、講義終了後も聴講者からの質問に、博学にして鋭い知見を開示いただき、午後九時までお付き合ひ頂ける形となり、受講者にとって大変幸せな時間となった。

第一回は四月一五日、「中世寺院の成立―権門寺社と荘園制」の題で執り行われた。

菊地先生は、今回の連続講座の目的について、「従来の日本宗教史研究においては、各教団の祖師の伝記と教理・思想に研究が集中していたため、いわゆる法然・親鸞・道元・日蓮など鎌倉新仏教の祖師達に注目が集まっていた。しかし、黒田俊雄の顕密体制論の提唱により、旧仏教に光が当てられることによって権門寺院の研究が進み、祖師の教理・思想の背景には、それを支える寺院組織や宗教制度が存在していたことが浮き彫りとなった。そのような国家や権門寺社の組織・制度の研究を深めることにより、教理・組織それぞれの方面からの新しい見方や双方

向的な新たな発見がある」と述べられた。

その後、先生は、中世社会における寺社の役割や、顕密体制下における古代寺院の組織などについて、特に権門寺院として強大な権力を誇った東大寺にスポットを当てて解説を下された。

すなわち、日本全国に荘園を有する荘園領主である東大寺が、国家の定めた律令制度のもとでどのような経済活動を行ったのか。東大寺は古代寺院から中世寺院へと転換していく過程において、荘園経営のみならず金融などのさまざまな手段を講じて財源を確保することにより、中世における権門寺院への道を開拓していった。次に、東大寺内の組織について、寺内にはさまざまな組織が存在し、国家から財産や文書の管理をするよう任命された官僧や、教学に専念する学侶、修行者の集団である堂衆など、立場の異なる僧侶たちによって寺院経営が進められていたことなどを明らかにされた。

菊地先生は、東大寺が国の定めた律令制度のもとで、古代から中世にかけてどのように展開していったのか、さまざまな資料をもとに詳細に説明して下さった。

(西山明仁 記)

第二回は五月二〇日、「中世社寺の強訴―本末関係と権門寺社の相克―」の題で執り行われた。

今回、菊地先生は、〈1、権門寺院による末寺編成〉〈2、白山の成立と展開〉〈3、本末関係と地方・中央権力〉〈4、中世社寺としての石清水八幡宮〉の四項目を立てて講義を進められた。

1では、中央の権門寺院が周辺地域の寺社を末寺化していく様相と、その重層的な末寺関係の広がりについて、2では、白山の起源や組織化、発展の様相、院権力の関与について細かに論じられた。更に、

3では、中央権力の介入、白山強訴の発端や延暦寺強訴、強訴の顛末と意義について、4では、石清水八幡宮の組織や祭祀と石清水八幡宮領、興福寺との相論―権門寺社の衝突―、嘉禎年間の相論について詳論して下さった。

以上から、菊地先生は、

・権門寺社内部、あるいは寺院権門は実態として一枚岩ではなく、これらはいずれもバーチャルな概念に過ぎない。

・これらが内部に矛盾や緊張関係を孕んでいたことは黒田俊雄も認めていたところであり、その利害調整にあたり、天皇が果たした役割をどう評価するかは、現在も結論が出ている訳ではない。↓摂政以下、みずからも権門の長として権門寺社を氏寺・氏社に抱えているような複雑な関係の中で、その都度試みられた政治的調整を、はたして権門体制や顕密体制として一般化できるのかが問われる。

・中世における都鄙関係の再評価がなされねばならない。

・近年、いわゆる「立荘論」の立場から荘園制の再検討が進み、地方の自立と中央への一方的な寄進により中世荘園制が成立・展開している訳ではないことが明らかにされた(第1講)。

・中世成立期の寺社本末関係は、本寺が末寺に所領・所職の支配権を及ぼしているように荘園制に乗る形で形成されている。

・地方寺社の末寺化にもまた、院や摂関などの中央権力の働きかけがあり、幕府も紛争に介入したが、荘園現地や地域寺社間の紛争を有利に進めるため、在地の側から中央に働きかけた一面もあり、一概に「上からの／下からの」編成とは評価できない。―等とまとめられた。



全体を通して、具体的事例を種々掲げながら、黒田俊雄の顕密体制論の問題点・矛盾点を指摘されたことが非常に印象的であった。（布施義高 記）

第三回は「僧尼のライフサイクルと身分」と題し、出家をして僧や尼となった人々の社会階梯、つまり社会のなかで僧尼がどのような階級・立場であったのか、またそれにまつわる僧尼の暮らしがどのようなものであったのか、などについて詳細な解説をしていただいた。以下、講義の要点を記したい。

日本では、西暦五八四年に出家した女性が最初の出家者であるといわれている。その後崇仏派の蘇我氏の外護や聖徳太子の仏教保護政策によって、僧尼の数は次第に増えていった。そうした僧尼の増加にともない、僧尼を統制するための制度が整えられていき、僧尼のランクと昇進コースが形成されていった。平安中期以降になると親王などの高貴な身分の人のために、「閑道昇進」と呼ばれる裏口入学のような出家制度も作られたという。

次に、慈円、親鸞をはじめ、天皇家や貴族から出家した僧尼など、上位・中位・下位の身分の違いとそれぞれの出世に至る個別の背景について、多くの資料をもとに解説していただいた。また、日蓮聖人の出自については、遺文のなかで日蓮聖人自身が語られることが少ないため、いまだに不明な部分が多く残っている。菊地先生は、上述した出世僧のさまざまなケースを踏まえうえて、日蓮聖人の出自と出家の動機について、独自の見解を開陳してください。（西山明仁 記）

第四回は、七月二二日、「神社聖教の発展と流布」の題で講義が執り行われた。

菊地先生は、初めに、古文書・古記録・典籍という文献史料の内、典籍の分類に収まる「聖教」は、更に「經典」「教理書」「儀軌」に分類されることを示され、その上で、聖教史料調査の歴史、近年の研究の傾向、更には、中世寺院の様相について詳しく論じられた。論中、日蓮教団を含む中世仏教教団では「聖教」が師資相承の核と位置付けられたことを指摘され、その意義を再認識した聴講者が多かったことと思う。

次いで、先生は、延暦寺・青蓮院門跡の事例を皮切りに、東寺文書・仁和寺文書・高野山文書、また、南都寺院の聖教について、その詳細に触れながら、寺院組織と史料群の関わりの特徴をご教示くださった。

以上を承け、菊地先生は以下のように纏められた。仏教典籍の根底には経律論の「三蔵」がある。しかし、特に経論については、注釈がまた注釈を生み、時には注釈が中国・日本撰述經典（いわゆる偽経・疑経）を創作するという複合性においてみていかなければならないこと。

こうして何代にもわたって蓄積された寺院経蔵の中には、中世の大寺院内部に成立した院家と法流にもとづき、以下のような階層性がある。

- ① 大蔵経にも収められているような基本的な經典類（ただしそれらに法流独自の読み点や注記が付されていく場合もある）。
- ② 經典から生まれた権威ある注釈書（たとえば天台三大部、唯識論、大日経疏・義釈など）。
- ③ ①②から随時作成され、師資相承により法流の核となる聖教群。

また、聖教は、寺院における日常的な実践活動の所産であり教学に関わる者だけではなく、宗教施設

を維持していくために作成・蓄積・保管されていたすべての文献資料を「聖教」として見直してみることが必要であること。

今後の日本仏教研究全体に重要な視点を供する、菊地先生ならではの貴重な御講義であった。（布施義高 記）

## 講義報告 連続講座 前後期

### 「法華仏教講座」

本講座は法華コモンズの前身・本化ネットワーク研究会での講義形式を踏襲し、およそ月一回のペース、毎回二時間の枠で開催されている。講師は、斯界で注目されている学者・研究者を毎回交代制でお迎えしている。ここでは、令和七年度前期第五回・第六回、後期第一回・第二回の講義について報告したい。各回ともに、常圓寺様祖師堂地階ホールを会場とし、Zoom実況配信を同時に行うハイブリッド型の対面式で講義が執り行われた。また、いずれの回も、土曜日午後三時三〇分への開催で、仏教思想研究・日蓮教学研究の第一線で活躍する研究者をはじめ多くの聴講者が集い、時間を三〇分前後延長しての活発な質疑応答が行われた。なお、講義は全回、受講者にビデオ配信されている。

### 【前期第五回 本間俊文先生】



令和七年（以下同）八月二日、法華仏教講座第五回として、本間俊文先生をお招きして「近世過去帳の世界―西山本門寺十八世日順『内過去帳』を中心として―」講義が行われた。

感じていたのだと思った次第である。

(林明彦 記)

## 【前期第六回 花野充道先生】

本間先生は、静岡県富士宮市の西山本門寺に伝わる寺宝の分類・解説に当たられ、その成果として「西山本門寺寺宝類聚」の刊行の一翼を担われ、特に今回の講義のテーマとなった十八世・日順上人の内過去帳（私的な過去帳）を図説する第三巻を受講者に進呈いただき、それを参照しながらの講義となった。

最初に、過去帳の変遷と現存状況をご説明いただき、平安期の横川首楞嚴院廿五三昧起請（横川首楞嚴院は現在の比叡山延暦寺横川中堂）に始まり中世前期には俗人も過去帳に記載されるようになり、また当該寺院と直接利害関係のない者や無縁かつ不特定の異常死者さえも記入する例などをご紹介いただいた。そして中世から近世初期の過去帳の現存数は僅少であり、この内過去帳には貴重な発見があったことなどをご紹介いただいた。

内過去帳であることの理由は、この過去帳が江戸にあった上行寺の檀信徒の物故者が記載されており、特に江戸の市中で移転を繰り返し、その近隣の付き合いの中で檀信徒以外の交流のあった人物も記載されていること、そしてそれが日順上人の西山本門寺晋山に伴い西山本門寺に残されていることなどから読み取れるとのことであった。

その膨大な記録の中から、歴史上も著名な江戸幕府に仕えた三浦按針の名が記録されており、かつ現在まで没年が不明であった二代目三浦按針（ジョセフ）の没年月日が明らかにになり、かつ記載の内容からこの二代目三浦按針と上行寺に交流があったことなどが明らかに読み取れるなど、本間先生の解説は非常に示唆に富む興味深いものであった。

是非とも皆様にもこの本間先生の成果である「西山本門寺寺宝類聚」、この巻三を目の当たりにし、その素晴らしい成果と江戸初期に生きた人々の息吹を



前期の法華仏教講座第六回となる花野充道先生講義「五時八教は天台教判に非ず」の再検討が、九月二七日に開催された。この講義は、約五十年前の日本印度学仏教学会で天台宗の関口真大氏が発表した「五時八教は天台教判に非ず」に対して佐藤哲英氏が反論して決着がつかずに終わった論争を再検討するもので、会場・オンライン共に多くの受講者が聴講した。

関口氏の発表内容は「五時八教廃棄論」で、天台大師の著書に「五時八教」の成語は無く、智顗の五時教判の重点は「五味（乳味・酪味・生蘇味・熟蘇味・醍醐味）」義にあり、頓漸五時教判（後述）のように經典の優劣を論ずるものではない。五味は機根論であり、五時は経論の勝劣を論ずる教判論であり別々なので、智顗の教学は機根論を中心に行うべきで、「五時八教」を天台教学として教えることを止めてもらいたい、というものだった。

講義の冒頭で花野先生は、関口氏がこの発表を行った当時の背景として一九七二年は創価学会が大石寺に正本堂を建立した年であり、関口氏は法華至上主義で勝劣派の折伏主義に対して、天台教学との差別化をはかろうとしたのではないか、との推論を述べられた。

この関口氏の五時八教廃止論に対して龍谷大学の佐藤哲英氏は、智顗に五時八教はなく後世に湛然や

高麗の諦観の『天台四教義』によって大成されたことは認めながらも、その思想の根源は智顗にあり、また智顗において五味は機根論、五時は教判論と明確な区別がないため、関口氏の「五時は五味に重点をおいた理解にあらずためられるべき」等の主張は受け入れられないと反論した。

報告者の私見だが、この論争の対立構図には日蓮教学における一致と勝劣の論争を重ねることができると共に、天台教学と日蓮教学の相違を観ることもできるだろう。補助資料として花野先生が『中外日報』紙に寄稿された「中国の天台仏教と日本の日蓮仏教―法華信仰、異なる立場―」も参照して頂きたい。

中外日報「論」欄 → <https://xgd/1U9kw>

花野先生はこの論争の再検討として、レジュメの第二章で「縁起説―空・円融平等か、それとも勝劣差別（至上説）か」をテーマに、張風雷氏に対する崔箕杓氏との質疑応答を引用して吟味し、天台は円融平等で円体無殊で諸法即実相の円教至上主義で、対して日蓮は法華・本門至上主義であるとの見解を示した。

続けて三章「四教の相待妙釈」と四章「四教の絶待妙釈」を検討して、五章「頓漸五時教判と智顗の四教五時教判」では、五時と五味の違いを詳しく見ていった。智顗以前の「頓漸五時教判」では、頓教は華嚴經（初転法輪）であり、漸教においては劣の阿含經から優の涅槃經までを五味で優劣分けして、「法華經には仏性と仏身常住が説かれていない」としていた。

しかし智顗は、法華經に仏性も仏身常住もあることを示す為、頓教の華嚴經も五味に入れて、味に基づく優劣判ではなく、五味の順序ながら釈尊一代の經典が五時として説かれたとする「時」の教判に改



変した、という。つまり智顗においては、佐藤哲英氏の指摘するように「五味は機根論、五時は教判論」というような区別はなく、むしろ五味を五時に改変して教判を立てたということになる。

以上の検討の結論として花野先生は、智顗は円教を至上とする四教判の上に立つて従来の頓漸五時教判を批判して、法華経の会三帰一に基づくあらたな「五時教判」を創唱したといえるのであり、「五時八教」の体系化は後の湛然にあったとしても、その思想の淵源は智顗自身にあったと見て良い、と関口真大氏の廃止論を論破して講義を終えられた。

その後の質疑応答も、多くの質問が出て大幅に時間を延長することとなったが、本年度前期の法華仏教講座の最終回にふさわしい実に充実した講義となった。  
(瀧澤光紀 記)

## 【後期第一回 間宮啓壬先生】



一〇月二五日、令和七年度後期【法華仏教講座】第一回講義が執り行われた。

今回は、間宮啓壬先生を講師にお迎えし、「日蓮における「無始の古仏」考―無始とはいったい何か?」の講題で

ご高説を賜った。

間宮先生は、松本史朗氏の論攷（『法華経』の文学性と時間性）を手掛かりに、『観心本尊抄』の「無始の古仏」の語に着眼しながら、日蓮教学研究の中で種々に考究されてきた、本仏釈尊が「無始」か「有始」か、という問題について講じて下さった。

本論では、先ず、漢訳の法華経本文や梵本の説示、先行研究を吟味され、「法華経自体は、釈尊を無始の

仏とは決して位置づけていない」ことを確認された。

次いで、日蓮遺文中の「無始」の用例を逐一検討された。そのことに由り、日蓮の場合、「私たちの認識能力ではもはや始点を確認できない程の、計り知れない遥か遠い過去」という暗喩表現として「無始」が用いられ、「無始」は時間の超越を意味しない、と検証された。

従って、「無始の古仏」の「無始」も、そうした暗喩としての「無始」と見られることを指摘された。

次いで、日蓮遺文中、「有始」と対比される場合の「無始」について、『一代五時鶏図』の「久成の三身」（三身ともに無始無終）に着目しながら考察を進められた。その際、松本史朗氏が高く評価された、慶林坊日隆師（一三八五―一四六四）の「所謂有始にして常住本有なる形これあるべし、報身は能成の智、法身は所成の境なれば同体の境智にして境智共に実相なるべし、実相の境智は本有にして常住なり、（中略）境智不二の智が境智不二の法身に冥合して常住なるを久遠の報身とは云（後略）」（『私新抄』）を取り上げられ、報身の常住性が法身に根拠づけられていることに着目された所論を紹介された。この見方を承けて、間宮先生は（報身のみならず）応身の常住性も法身の常住性に基礎づけられると指摘され、「三身の基礎的性格を法身に見出し、その「無始無終」性を以て三身を統一したと考えられる」と論じられ、先行研究についても細かに批評を加えられた。斯くして、（日蓮教学における）「本仏は過去「五百塵点劫（已前）」といわれる特定のある時に成道した仏であり、かかる「本時」にあつて、本仏は諸仏を生み出す「本地」を確立した」と講義全体をまとめられた。

日蓮教学研究界全体に大きな刺激を与える、素晴

らしい御講義であった。

日蓮遺文中の関連する説示をすべて丹念に調べ上げられ、その厳密な意味を検証される間宮先生の真摯な御姿勢に、心より敬意を表したい。

なお、今回のご講義の詳細は、近く論文として公表される予定である。  
(布施義高 記)

## 【後期第二回 都守基一先生】



一月二九日、都守基一氏による講座「日蓮教団諸門流の教学」が執り行われた。

都守氏は本講座の視座について、「おもな日蓮教団の門流の変遷と教学理解の相違を、日蓮宗の立場から概観する」

ことを目的として、豊富な資料を紹介しながら詳細に解説してくださった。

はじめに、六老僧を中心とした日蓮教団の歴史的展開について、日蓮聖人滅後より令和現代にいたるまで、詳細に説明された。このなかで近世の資料『寺院本末帳』の記述より、各門流の本寺および末寺の数を明らかにされ、また文化庁から発行されている令和六年版『宗教年鑑』の記載から、既成門流教団はもとより近世には存在しなかった日蓮系の新興在家教団の現況についても言及された。

つぎに、日興、日什、日陣、日隆、日眞の勝劣派の各門流の教学について、本迹勝劣論や本尊論の展開を中心に概観したうえで、一致派である日蓮宗の教学について述べられた。このなかで、上記の勝劣派と一致派による本迹勝劣一致論争の展開と、かかる論争に終止符を打つべく両派が参集して会議を開

き、和睦の条文を定めたことなどを紹介くださった。また、両派の論争に関連して、いわゆる法本尊と仏本尊の問題、具には一尊四士と大漫荼羅の関係性などについてもご説明いただいた。

今回、都守氏が取り上げてくださった日蓮教団諸門流の教学をめぐる問題は、日蓮聖人滅後の日蓮教団における、法華経本迹の一致勝劣をめぐる問題である。それは各門流において教学の核となるものであり、ひじょうにデリケートな側面を有する。そこにあえてメスを入れてくださった都守氏には甚深い謝意を表する次第である。

本講座には各門流の教師の方が聴講して下さり、講座終了後には各方面の方々からご質問があり、本迹論を中心に熱心な質疑応答が交わされた。

(西山明仁 記)

## 講義報告

### 特別集中講座 全二回

#### 「読経に意味はあるか」

―読経の歴史、読経の理論、読経の将来―

講師 大竹 晋 先生

報告 澁澤 光紀



大竹晋先生の特別集中講座

「―読経に意味はあるか―読経の歴史、読経の理論、読経の将来」の講義が、第一回十月四日(土)、第二回十一月八日、共に午後一時半より五時半まで、新宿常円寺祖師堂地

階ホールにて開講された。

大竹先生は、読経の意味付けを自己の為と他者の為に分け、自己の為は暗記だが、他者の為では①生者のための講経と②亡者のための慰霊に分けられた。

特に慰霊の読経については、その典拠を『大唐西域記』と『梵網経』から引き、日本の諸宗で亡者のため各宗の所依の經典が音読されるようになるのは、『梵網経』の代わりだったのではと推測された。

また、日本での読経は「漢文の棒読み」が基本になるが、近代に入り読書が黙読となり漢文の読解力が衰えて経典解釈の講経も消滅すると、漢文棒読みでは檀信徒が理解できず、長時間の読経に苦痛を訴えるようになった。この苦痛をどうするかが問題となり、明治期にさまざまな読経の理論が発表された。

第一回の講義では、関連の論考を三つ引いて読み上げながら詳しく解説された。

○高田道見「読経改革論」(明治四十年)

―訓読による読経を主張。

○清水友次郎「読経廃止論」(明治四十二年)

―読経の廃止を主張。

○梅原隴圃「読経は廃止すべきか」(明治四十二年)

―読経の廃止反対を主張。

まず高田道見の「読経改革論」の論旨は、いま仏教の社会的意義は葬祭の一点にありとして、社会百般の現状は悉く改革されつつある中で、「仏教各宗派は依然として此の葬祭法を革新せざるは何ぞや」と嘆き、「其の革新とは従前の棒読を廃して悉く訓読と為すにあり」と読経の訓読を提唱、現代にも通ずるよくわかる仏教の必要を説いている。

次の清水友次郎の「読経廃止論」は、「読経、々々、アゝ何たる奇習ぞ」で始まり、読経を「進歩改革に

志ある仏教家の須らく第一着に廃止すべき大悪習慣」として、「読経の無益有害なることは火を見るよりも明らか」「仏教はすでに生命を失っている」「(儀式を主とする)旧仏教は、その悪習慣と共に一日も早く消滅し去るが、我々のため、国家の為、世界の為」と極めて手厳しい。

この清水論考に対して反論したのが梅原隴圃の「読経は廃止すべきか」(上下)である。梅原は、清水の「絶対廃止」の論拠が弱く、漢訳の棒読みが苦痛などは改良説に属するもので、また読経作法が原始的な言語崇拜によるとしても、信念を持って宗教的生活を味わう人にとっては「読経は宗教的情操の上に深き感銘を与ふる」価値がある、仏教界の読経の弊害は改革すべきもので、清水氏の絶対読経廃止論は角を矯めんがために牛を殺すことだ、と述べて終えている。

第一回引用の論考は近代化路線が強い「読経否定」の傾向だったが、第二回講義では読経の意義を説く鈴木大拙「読経の神秘」(大正十五年)や中山理々「僧侶読経論」(昭和十七年)の肯定論が採り上げられた。

鈴木大拙の「読経の神秘」は、『中外日報』に五回に分けて掲載されたもので、大拙は「お経の意味が分からない」ことについて、「わからぬ事は、わからぬと云う理由だけで有難くなる。特に有難い人の言葉となると、その傾向が強くなる。ここが宗教と哲学と違う点だ」、また「歴史がどうの、仏語がどうのと言わなくても、声そのものに不思議はある」として「声」に注目する。お経の棒読みは「陀羅尼と同一視」できるので、意味など求めず「無心の状態でお経を聴いていると、そこに一種の宗教的情緒の漂



いが看守される」として、その神秘的効果を宣揚している。

中山理々の「僧侶読経論」は、『教学新聞』に三回にわたり掲載された論考だが、読経無用論に対してまず「読経で生活して何処が悪いのだ」と一喝して、

「読経は立派な仏行である」と述べ、読経の功德が説かれた多くの経典を引用していく。そして、仏设法要で足の痺れを我慢している姿は、「先亡の霊界と交流する瞑想の一時」として尊い、しかし仏法の意味を分かることも大切で、法事で僧侶の「仏法の片鱗でも説き聞かす心構え」が有難いと結んでいる。

大竹先生は、引用した諸論考の傾向を「訓読無用論⇄有用論」、「意味無用論⇄有用論」と分類した上で、最後に「私のお経が仏様に届いているか」と悩んだ曹洞宗の小島祥芳尼（一九三〇〜現在）の体験を紹介した。小島師は、悩んだ挙句の座禅中に「お釈迦さまが宇宙は一つの命と言った通り、池に小石を投げると波紋が広がるように私のお経は必ずや仏様に届くのだ」という悟りを得たという。この逸話をもって、読経の価値と読経人口を増やす大切さを述べて、二回にわたる講義を終えられた。

質疑応答は、第一回目では読経無用論に対する反論が多かったが、第二回目は時間も長く取り、各宗派での読経の現況や学術的な意味付けなども発表し合い、読経の将来について意見を交わす大変充実した論議の場となった。

大竹先生には、本年前期の四月十一日（土）でも、一日集中講座「菩提と覚——仏教における覚醒の概念の歴史」をご講義いただきます。皆さま、ぜひご予約頂きご聴講のほど宜しくお願いいたします。

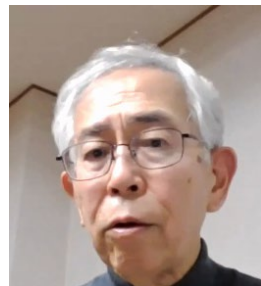
## 講義報告

### 一日集中講座

「訓読成立史から見た聖徳太子『法華義疏』」

講師 石井 公成 先生

報告 竹内 敬雅



本講座はアジア諸国の仏教とその周辺文化のみならず、平安文学にも造詣が深く、また仏教データベースの第一人者でもある石井先生をお呼びし、漢訳仏典がどのように日本で受容されて訓読が成立していったのか詳細に解説され、また三経義疏中国撰述説に対して『法華義疏』を中心に一字一句の綿密な検討と、データベースを利用した解析の両面から日本撰述であることや、聖徳太子実在を明らかにされたご研究の一端をお示しいただく貴重な講義であった。

最初に訓読成立に関する先行研究をご紹介され、訓経の存在や、奈良時代の僧侶が經典を音・訓いずれか、もしくは両方で読誦出来たか記す資料を示して訓読成立年代の各説を紹介された。訓読成立当初は和語として自然な形で読まれ、平安初期では二字の熟語を日本語の一語としたり、「なり」や「すなわち」などを読まずに訓読されていたが、漢語が日本語の語彙として定着するに従って次第に漢語を字音のまま読んだり、一字一句に訓読を当てるように変化していった歴史を、「宜」の構文と用法の変化についての論文を紹介しながら説明された。

また、鎌倉時代の法華経訓読について、日蓮聖人の真蹟断簡二四三『三車四車』に書かれた法華経訓

読と、鏝阿寺本『仮名法華経』（一三三〇年完成）に見られる訓読を比較した高森大乘氏の論文から、鎌倉時代の真言系寺院にも、日蓮聖人が読まれていたであろう天台系の訓読が影響していた事を紹介された。他にも木簡に記された資料や『先代旧事大成経』『聖皇本紀』、宣命を挙げて、和風漢文の歴史や、その成立に聖徳太子が関わっている可能性を述べ、和風漢文の変格語法の研究についても詳細に示された。続いて現存している『法華義疏』の誤写と訂正部分を示して、太子が草案を作り、それを代筆した者が誤写した箇所を太子が訂正したと論理的整合性をもって聖徳太子の存在を説明された。

その後、三経義疏の受容史と論文の紹介に続いて、三経義疏の類似点や、『源氏物語』を思わせる長文表記、日本的な気風などを挙げて日本撰述であることを明確に示された。

また、石井先生が現代の仏教研究において欠かさないSATやCBETAなどの仏教典籍データベースの製作者であり、その利用法に精通していることや、さらにそのデータベースを利用したNGSM分析の手法について触れられ、受講者一同感謝の念を抱くと同時に、常に最先端の研究手法を用い続けていることに感嘆していた。

その後も様々な東アジア言語の知識に基づき、一字一句検討を重ねた上、データベースで裏付けを行っていることを示しながら『法華義疏』に書かれる日本的な表現箇所について丹念に解説された。

ご講義の途中には平安文学や物真似に関する研究など、先生の多才な側面のお話もあり、講義後には三十分ほどの活発な質疑応答が行われ、大変充実した集中講座となった。

## 「仏教哲学再考②」

## 「『大乘起信論を手掛かりにV』」

講師 末木 文美士 先生

報告 佐古 弘純



現在の日本仏教研究の第一人者として数多くの功績をあげながら、なお果敢に新たな学的挑戦を続ける末木文美士先生の連続講座、「仏教哲学再考②」『大乘起信論』を手掛かりにV」が開催されました。

本講座は、講義概要に「応用的に問題を広げ、手探りして検討していきたい」とある通り、最先端の研究成果を踏まえた、先生の貴重な見解を拝聴することができます。以下、ご報告いたします。

第十七回目は、今までの復習とこれからの見通しを確認する内容でした。

はじめに、『大乘起信論』（以下『起信論』）から法蔵『大乘起信論義記』へ、そこから澄観・湛然・『釈摩訶衍論』（以下『釈論』）に展開する全体の見通しを確認しました。続けて、『起信論』は真如と生滅の相对概念であったが、法蔵により真如の一元化（随縁・不変真如）が図られ、さらに『釈論』に至ると無因無果である「不二摩訶衍」がたてられて、「基体説を超える絶対」（神秘主義）を頂点とした「不二摩訶衍」が『起信論』を超えたことを説明されました。

そして、日本密教の展開として、空海の「不二摩

訶衍」の言語化（法身説法、絶対の世界の断絶）と、安然の「不二摩訶衍＝真如」とする一元論（絶対的世界と現象的世界をつなげる）について解説し、加えて「覚鑊の五輪説（即身成仏の実践的到達）」と本覚思想（現象世界の絶対化）が今までの仏教思想とは別ルートの思想ではないか」と指摘されました。

最後に、補論として、中世仏教の政治思想として、王法仏法相依論の立場である栄西『日本仏法中興願文』・貞慶等『興福寺奏状』と、仏法優越論の立場である道元『正法眼蔵』・親鸞『教行信証』、『皇太子聖徳奉讃』・日蓮『立正安国論』について詳細に解説され、講義終了となりました。

第十八回目は、空海・最澄と『大乘起信論』をテーマとした講義になりました。

はじめに、空海の『弁頭密二教論』『秘蔵宝鑰』等では「本覚」という概念そのものは最高段階に位置づけられていないが、經典解題類の著作では、『釈論』を引用し、「本覚」の位置づけが『起信論』と比べてはるかに高くなっている、と指摘されました。例として、『大日経解題』では「本覚」を仏の本源的な覚心として、『金剛頂経解題』では「本覚」が諸仏を統合する原理に高められていることなどを解説されました（末木『鎌倉仏教展開論』、トランスビュー、二〇〇八、八一頁）。

続けて、師茂樹氏『最澄と徳一』（岩波新書、二〇二二）の論争過程の図を参考にして、最澄は『起信論』を実教に位置づけ、『釈論』を偽撰と見ていたことを説明されました。さらに最澄は、「真如凝然」とする徳一に対し、「随縁真如」を高く評価していることを示されました。

最後に、法相宗の真如論（深浦正文氏『唯識学研究 下』を参考）は、真如からの縁起ではなく、現象たる阿頼耶識所蔵の種子より展開される阿頼耶識縁起であり、「真如凝然不作諸法」を説き、現象と真如は「不二不異（不即不離）」の関係として、を解説され、講義終了となりました。

第十九回目は、前回の講義を補足した内容となりました。

はじめに、『起信論』と『釈論』の系譜の中で澄観・宗密の華嚴禅の流れに位置する「永明延寿（中国禅僧）」に焦点をあて、その大著『宗鏡録』百巻を取り上げ、『釈論』の影響を大きくうけているわけではないが、それを基礎として『起信論』を解釈して新しい禅宗の流れをつくり出そうとしており、円爾弁円・癡兀大慧がその延長線上に連なることを説明されました（千葉正『宗鏡録』と『釈摩訶衍論』、駒大大8学院仏教教学研究年報二十七、一九九四、参考）。

続けて、最澄は『釈論』を偽書として採用せず、湛然の「随縁真如説」を中核とする顕教的理論であったが、安然是最澄の偽書説を継承しつつも、空海と最澄を結びつけ、真如論を密教化して用いていることを指摘されました。さらに、最澄『守護国界章』の「覚前の実仏」について、「覚った状態で現前に見る実仏」（大竹晋『現代語訳最澄全集』3、参考）と解釈した方が妥当であることを示されました。

最後に、駒場祭での講演会（「死者たちとともに」）の発表を聴講者に解説して下さり、加えて後日開催される京都大学のシンポジウムの報告を次回行うことを約束され、講義終了となりました。

第二十回目は、「古層の形成と日本密教」について



ての講義となりました。

はじめに、丸山眞男氏の「古層論」(『忠誠と反逆』、ちくま学芸文庫、一九九二)について説明がありました。丸山氏の、「記紀神話」の冒頭分析から「つぎつぎ、なりゆく、いきほひ」という歴史意識が日本の根底にあり、合理化した近代社会を実現できないでいる、という主張に対し、先生は、「古層」に類する発想(アニミズム論や縄文化論など)は史実として確認し難いが、仏教以前に通底するものがあるとすればシャーマニズム的呪術であり、固定的な「古層」ではなく、歴史的に形成され変動する「基層」ではないか、と指摘されました。

次に、仏教と「基層」として、死生観の観点から「業と輪廻(三世因果論)」を取り上げられました。先生は、「これは、東アジアの仏教で共通する考えであるが、日本の特殊性は、長い輪廻というよりも、来世を中心としており、浄土往生思想や即身成仏論という矛盾と併存していく」と示されました。さらに、密教神秘主義が先端理論という面と一般民衆に定着して基層化する面の二重性をもっていること、縁起説と基体説の対立、法身の説法(密教)と応化身の説法(顕教)、『釈摩訶衍論』の神秘主義、について詳細に解説されました。

最後に、即身成仏といった高度な密教教理とその基層化の関係について、「五来重氏は民俗学の立場から両者の断絶を主張するが、決して両者は無関係でなく、高度な教理が通俗化(「密」の言説を「顕」の言説として解釈)しながら定着していったとすべきではないか、その媒介としての呪術(仏教的呪力)ではないか」と先生自身の立場を明確にされ、講義

終了となりました。

この講座は、半年間休講となりますが、今年度後期講座から再開されます。末木先生の講義は、以前の復習を兼ねて進んでいくため、新規聴講でもまったく問題ありません。また、先生の最先端な知識を拝聴できる貴重な機会となっております。皆様の聴講申し込みをお待ちしております。なお、本講座はリモート開催となっており、講義動画も受講者に配信し、期間内であれば何度でも見ることが可能です。詳細につきましては、「法華コモンズ」ホームページからご確認ください。

## 講義報告

## 連続講座 後期全六回

## 『法華経』『法華文句』講義

講師 菅野 博史 先生

報告 澁澤 光紀



菅野博史先生の『法華経』『法華文句』講義は、昨年一二月で通算九一回を数えます。昨年九月からテキストの『法華文句(Ⅲ)』は、「葉草喻品を釈す」(七九〇頁)に入りました。経文は、「信解品」

の最後で摩訶迦葉が釈尊の説法を「一乗の道に於いて宜しきに随って三と説きたもう」と述べたことを受け、世尊が自らの説法を「一相一味の雨が大小中の草木を等しく潤し成長させる」様子に喩えるところから始まります。では、次に四回にわたる講義を簡単に報告していきます。

始めに「葉草喩品」という題名についてですが、土地があり雨が草木(葉草)がある中で、それぞれ有用だが葉草はとりわけ有用なので、仏の譬喩と教えを深く領解した四大弟子(声聞)を葉草にたとえて、「葉草喩品」と呼ばれるとのことでした。

実はこの「葉草喩品」、鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』では三草二木の喩えでおわっていますが、サンクリット本には訳されていない重要な譬喩が、あと二つ出て来るのです。

一つは陶器(入れ物)の喩えが述べられていて、仏乗という陶器は一つだが、中に入れるもの(声聞と縁覚と菩薩)により陶器の性格が変わるという話です。もう一つは盲人が葉草によって視力が回復するように仏は医王として衆生を目覚めさせるという喩えで、これが「葉草喩」という題名の素の話でした。しかし鳩摩羅什の翻訳には、この二つの譬喩が訳されていないので、羅什の訳した法華経には無かったのか、あるいは羅什が訳さなかったのかが分からずに、研究の対象にもなっているそうです。

講義は、『文句』テキストの経文解釈を詳しく説明されながら進んでいきます。経文に随ってその教義を解釈する「随文釈義」ですが、短い経文中の一句一句を取り上げて、重要な教義の概念を読み取って論じていく天台の読解力には、驚嘆するばかりです。十一月の講義では、経文は「密雲はあまねく布き、遍く三千大千世界を覆い」からで、ここで三草二木の喩えが解釈されます。ここは葉草喩の中心となるところなので、少し詳しく報告いたします。その経文の概要は次の通りで、「二つの分厚い雲(密雲)が世界をおおい雨をふらせると、すべての

大中小の草木は潤うが、草木はそれぞれの差や別にしたがって成長していく。仏の教えもまた同様に、仏は大きな雲が起るように人々をつつみ、「われは仏・世尊なり。全ての人々を悟らせるためにいま法を説く。皆法を聴くべし」と語りかけて、衆生の機根の違いに合せて、その堪えるところに随って無数の説法をおこなう。それを聴いた衆生は歓喜して、現世は安穩に後生は善き所にいける思いを得て、それぞれの力に合せて修行の道に入ることができた」と述べられているところです。

『法華経』のキャッチフレーズともいえるべき「現世安穩・後生善処」という経文が出てきました。私はこの言葉に輪廻転生のリアルを強く感じて、御首題帳によく添書きするのですが、『文句』では六道に当って幾つもの違った解釈を呈示しています。

まず「現世安穩」とは花や果実の成長のことで、「後生善処」はその成長の様相だとします。また、場所を三途（地獄・餓鬼・畜生）として、地獄で火が消え熱湯が冷えれば「現世安穩」、畜生が天・人に生ずれば「後生善処」です。

同じように人天の場合、二乗の場合、菩薩の場合と続き、今回の経文の最後となる「諸の障礙を離れ諸法の中に於いて、力の能うる所に任せて漸く道に入ることを得る」を釈して、諸の障礙を離れるのが「現世安穩」、道に入ることを得るのが「後生善処」だとしています。

また「密雲」ですが、これは身口意の三密で、経文の「慈悲」は意密、「形（形色）」は身密、「雷声」は口密になります。広く行き渡る雲は、仏の慈悲の浸透を譬えています。その潤いを受ける草木たち

が「分齊にしたがって」成長するように、降る雨のように平等で一つの仏の慈悲も、聴聞する人々の分齊にしたがってさまざまに理解されるということです。教えは一つで平等でも、聞く人の段階で違いや差別が生じてくるわけです。

この解釈で特に強調されるのは、如来は「法を説くに、一相一味なり」で、「法」を聴く衆生は「その種の如くく潤いを蒙り、各成長する」のであって、一つの「法」を各々の「種相体性」の違いによって別々に理解して悟りに近づく、という点です。

『文句』の解釈では、「如来」は「二相一味」「一地一有」の無差別の実相（真実）だが、草木などの「衆生」は差別の権相（方便）であると対比しながら、無差別―差別論が展開されています。

実は、批判仏教を提唱した松本史朗氏は、仏教の縁起説に対立するインドの土着思想由来の基体説という仮説を、この薬草喩品から構想した、と述べています（『法華経思想論』五九六頁大蔵出版）。

基体説とは、唯一の実在で単一の基体（界）から様々な超基体（法Ⅱ現象）が生じるとする思想で、薬草喩品でいえば「如来の一相一味、一地一有」が単一の基体で、「大中小の草木や衆生」が基体から生じた多なる超基体になります。これに対して仏教の縁起説は無基体論で、現象する時間的な連続性が縁起としてあるだけで、基体―超基体、真実―方便、実―権、本―迹のような構造があるのではないとみます。『文句』の解釈は、基体説に沿った見方で、草木の違いなどの現象的な差別は、その基体である如来の一味に帰して、差別Ⅱ無差別の「無差別」になります。

薬草喩品では、一味の雨を受けて多様な草木がおのおのに成長する喩えを、平等の証であり差別の解消としているのですが、松本氏は、一味の雨で大小の草木が等しく成長するとしても、「大小の差別が解消されるわけではない」「大・小乗の差別を許容し、さらには肯定する」として批判しています。

菅野先生は講義の中で、この松本先生の「薬草喩は基体論で差別思想」とする批判仏教の見解にふれられましたが、あくまで一つの見方として紹介して天台の解釈が一般的であったとしました。

ここで考えておきたいのが、釈尊の説法とは「対機説法」だったということです。薬草喩品の如来の説法は単一であり、衆生が各々の機根にしたがって理解して悟りへの糧とします。しかし対機説法は、聴く機根に合わせて如来が様々な説法することですから、有様は全く逆で単一ではありえないわけです。つまり対機説法とは、方便で導いていく説法であり、単一な悟りへの真実は如来の密意としてあることとなります。そう考えると、薬草喩品で説かれた如来の単一の言葉が、それぞれの機根や種姓にしたがって別々に違う内容で理解されながらも、差別なく同じ悟りの道へと導くことができたのかどうか、です。この疑問点は、また菅野先生にご教示を受けながら学んでいこうと思います。

この講義では、充実したレジュメ（講義する経文の漢文・訓読、『文句』の科文、解釈文、現代語訳文）が用意され、初めての方でも講義についていけます。ぜひ随文釈義の面白さを味わいながら、共に理解を深めて行きましょう。



# 法華コモンズ仏教学林 前期講座一覧

2026(令和8)年度前期講座 開講:4月~9月

●すでに終了した講義も、動画配信等で受講できますのでお申込み下さい●

- 一日集中講座「菩提と覚—仏教における覚醒の概念の歴史—」 全1回【対面&実況】  
開催日時: 4月11日(土) 午後1時30分~5時30分(4時間) 講師: 大竹 晋  
【受講料】3,000円
- 一日集中講座「新・学問のすすめ 研究者失格!—『見るなの禁』を見た男—」  
開催日時: 5月9日(土) 午後1時30分~5時30分(4時間) 全1回【対面&実況】  
【受講料】3,000円 講師: 磯前順一
- 一日集中講座「本覚思想の研究史と批判仏教論争」 全1回【対面&実況】  
開催日時: 8月1日(土) 午後1時30分~5時30分(4時間) 講師: 石井公成  
【受講料】3,000円
- シリーズ講座《法華仏教講座》 全6回【対面&実況】  
開講時間: 土曜日 午後3時30分~5時30分  
第1回 4月25日「性と仏教」 講師: 上杉清文  
第2回 5月16日「法華教学における顕本論と化導論(1)」 講師: 花野充道  
第3回 6月13日「八品門流門祖日隆の教団成立について」 講師: 小西日遼  
第4回 7月 4日「日蓮の世界認識とその意義」 講師: 丹治正弘  
第5回 8月29日「日蓮・鎌倉幕府・朝廷」 講師: 石附敏幸  
第6回 9月 5日「現代思想としての日蓮—上原専祿の日蓮論—」 講師: 澁澤光紀  
【受講料】1期6回分12,000円、1回2,000円
- 連続講座「『法華経』『法華文句』講義」 全6回【対面&実況】 講師: 菅野博史  
開講時間: 月曜日 午後6時30分~8時30分【受講料】1期6回分12,000円、1回2,000円  
開催日: 第1回 4月27日 / 第2回 5月25日 / 第3回 6月29日  
第4回 7月27日 / 第5回 8月24日 / 第6回 9月28日

【会場】新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 電話03-3371-1797(寺務所)

【申込】受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX: 042-627-7227

mail: hokkecommons@gmail.com / ブログ: <https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 法華コモンズ仏教学林 事務局

# 賛助会員一覧（敬称略）

※令和七年度分として

## 個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	1口	間宮 啓壬
6口	松原 勝英	1口	櫻井 義秀
6口	中野 顕昭	1口	長谷川正浩
6口	持田 貫信	1口	互井 観章
2口	鍋島 真永	1口	澁澤 光紀
2口	菅野 博史	1口	成田 喜達
2口	国府田義昭	1口	久保田正尚
1口	西山 茂	1口	匿名 希望
1口	菊地 大樹		

## 法人会員 ※1口 五万円

3口	法音寺	2口	本妙寺
2口	東洋哲学研究所	2口	立行寺
2口	顕本法華宗什青会	2口	天龍寺
2口	持法寺	1口	妙法寺
2口	本國寺	1口	善生寺
2口	善龍寺		

◎皆さまのご賛助にご支援に篤く感謝申し上げます。  
令和八年度も引き続きご支援のほど、お願い申し上げます。

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。左記の要領にて、受付けておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

## 【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口（1万円）
- 法人・団体会員 1年間1口（5万円）

## 《お申込み年度の特典》 変更点有り

- 1、個人会員で6口以上の方は、年度内前後期の全ての講座をご受講・動画配信視聴出来ます。
- 2、法人・団体会員では2口以上で、1口ごとに所属団員1名が年度内前後期の全ての講座をご受講・動画配信視聴出来ます。

- お申込み頂ける方は、次の内容を書いて、表紙タイトルまた11頁下にあるメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。
- ★ 個人か法人か、また何口かを明記する。
- ★ 名前、年齢、住所、電話、ファックスまたはメールアドレスを明記する。

- 直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙か、下記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林

【口座番号】 00150071634712

# 「講座映像版」販売のお知らせ

○ 菊地大樹先生「吾妻鏡」と鎌倉仏教」6回

○ 池上要靖先生「初期仏教研究」6回

○ 菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

① 鎌倉時代を射程にいれて ② 《顕密問題》を考える

③ 日本宗教史の名著を読む ④ 鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

○ ダウンロード版：価格一万二千元（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジュメPDF

○ DVD版：価格一万二千五百円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジュメ印刷物

◆ 詳細はブログ(<https://hokke-commons.jp>)参照。

## 【本化ネットワーク叢書】

叢書3『本門戒壇論の展開』領価一冊二千元＋送料

※『日蓮の諸宗批判』『九識説』とは何か  
はコモンズのブログで無料公開中です。

## 法華コモンズ通信 第十六号

発行日 二〇二六（令和八）年二月十六日

編集発行 法華コモンズ仏教学林

発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町一・一九

【FAX】042（627）7227